知層の柱

Keywords
情報社会　書物
無限成長　ハイコンセプト

K09042　小林　昂広

1. はじめに

情報化社会が進み、世間に広まるにつれ、書物は衰亡の危機に瀕しているのではないだろうか。これまでひっそりと蓄えられてきたテクノロジーの群れが知識の保管庫である書物にまで押し寄せ、今にも乗っ取られようとしている。

2. 研究背景

2.1現在の情報社会

情報は実態がいないのに不気味に偏在し日々成長していく。成長を加速させるインターネットは、端末をもつ誰もが気軽にアクセスできる電子技術であり、情報社会の成長は、秩序、伝統、文明の喪失を想起させずにはいられない。

元来知識を蓄える場として長きにわたって利用されてきたのは書物である。この紙を用いて長い年月保存されてきた書物が今日の著しい情報社会の発展により存在が希薄になってきている。

2.2情報社会の今後

18世紀の農業革命、19世紀の工業革命、20世紀の情報革命と時代にそってたびたび革命が起こる。革命のによって社会は変化していくが、その間も書物は変わらず存在してきた。しかし、情報革命によって情報社会になった現在、また未来において、書物の存在感は希薄になっていくと考えられている。しかし、情報社会が加速していくと同時に過度な情報に溢れていくであろう情報の海のなかで人々は自分の欲しい対象を精査するのは困難になっていく。そういった中で書物は出版社などの“フィルター”を通して世に送り出されているために、内容や情報に、ある程度の保証がされている点で、情報化社会が発展すればするほど、書物の価値が高まるのではないかと考えられる。

2.3ハイコンセプトの時代

ダニエル・ピンク著の「ハイコンセプト」によれば、情報社会の次の時代はコンセプトの時代が訪れる。情報社会までの時代で、人々は大部分の物事をオートメーション化する事が可能になっている。そのような世の中で、今後求められる物は何かと考えた際、ただ物を作るのではなく、いかにして精神性に訴えるものを作れるか、多くの人が共感するような、機能を超えた統合されたモノを作れるかが重要になり、そうイった時代が訪れたとき、電子書籍などの画面をのぞいてみる単純なデータではなく、五感を使って読んでいく、実態のある書物の価値が見直されるのではないだろうか。

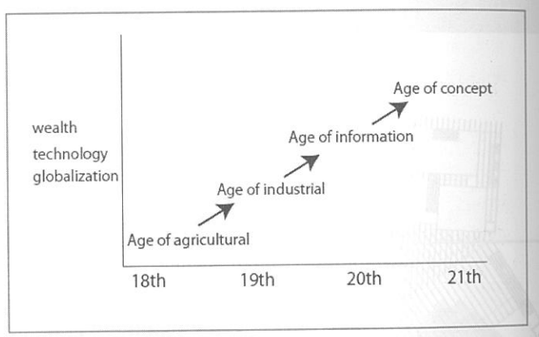


図１ハイコンセプトの時代への移項

3.研究目的

情報社会の発展により書物の存在感は希薄になっていく。だが、本はどんなに情報社会が発展したとしても本は変わらぬ価値をもったものとして存在していくべきである。書物の存在が希薄な現在において書物の重要性を再認識し、情報社会と書物の新たな関係を模索していきたいと思う。

4.プログラム

国立国会図書館

国立国会図書館は、日本における、唯一の国立図書館である。国立国会図書館は、国会法第130条の「議員の調査研究に資するため、別に定める法律により、国会に国立国会図書館を置く」の規定にもとづき、国立国会図書館法により昭和23年（1948年）に設立された。

国立国会図書館は、日本国内で刊行される出版物を網羅的に収集する納本制度の下、収集資料を国民の文化的財産として永く保存するとともに、その目録である全国書誌をデータベースその他の形態で作成し、これらの資料にもとづいて（1）国会（2）行政及び司法の各部門（3）国民に対してサービスを行っている。

近年、国会図書館では、出版物を保存する書架が足りなくなるという問題が生じている。そこで本計画では、集積する出版物を保存、出版物の価値を再認識するための国会図書館を計画する。

5.敷地

・墨田区押上・東京スカイツリー周辺

写真１　敷地写真

情報社会の象徴ともいえる東京スカイツリーは2012年2月に墨田区押上に竣工した。その影響で、押上は現在日本で最も人気のある観光スポットの一つになっていると同時に,急激な周辺環境の変化が起こっている。本計画ではスカイツリーの影響によりスカイツリー周辺で加速度的に増している再開発地を利用する。さらに、本計画では国会図書館という近隣住民だけの利用に留まらない公共の文化施設を計画する事で、近年問題となっている観光客と近隣住民の摩擦を取り払うことも念頭に入れている。

6.設計趣旨

国立国会図書館は日本国内で観光される出版物を網羅的に収集する納本制度により、常に図書館を拡大していく必要性がある。従来の書架というものは、コルビジェが提唱したドミノシステムにもとずいたフラットなフロアで構成されている。それによって一般的に各ジャンルごとに配置される書物の配置計画はすべて平面で処理されていくが、各階のフロアがきり離されているために、自由が利かない部分が出てくる。仮にあるジャンルの書物だけが膨張、縮小した場合そのジャンルの書物だけがフロアからはじき出されてしまう。そう言った事からも図書館の書架は常にフレキシビリティを求めている。

また、国立国会図書館の蔵書は、図書・雑誌など全て合わせると年間約100万冊のペースで増えていく事からも書架の慢性的な不足は問題とされている。そこで、無限成長美術館をソースに成長していく図書館を計画したいと思う。

7.設計手法

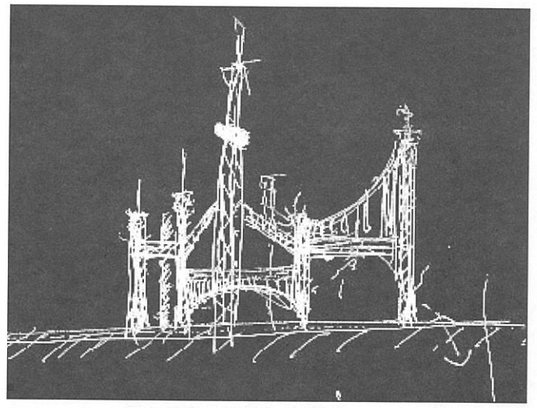


図2イメージスケッチ

7.1全体計画

本計画は主に書架の機能を持つ塔と閲覧室やAV室など通常の図書館にある書架以外の機能を持つスカイブリッジの2つで構成されている。書架の機能をもつ複数の塔は、情報化社会の象徴である東京スカイツリーの周辺を取り囲むように、伸びていき時がたつにつれ増加する書物に伴って成長していき、その数を増やしていく。

7.2書架の塔

本計画では、ル・コルビジェの無限成長美術館の概念を取り入れるため、書架機能をもつ塔は極力扱う機能を少なく抑えた。天に向かって愚直にのびる螺旋のフロアで構成された塔は、旧約聖書に書かれたバベルの塔を彷彿とさせる。スカイツリー周辺に複数建つであろう塔は、情報化社会においても、書物の存在意義を示すモニュメンタルな建築になるであろう。

7.3スカイブリッジ

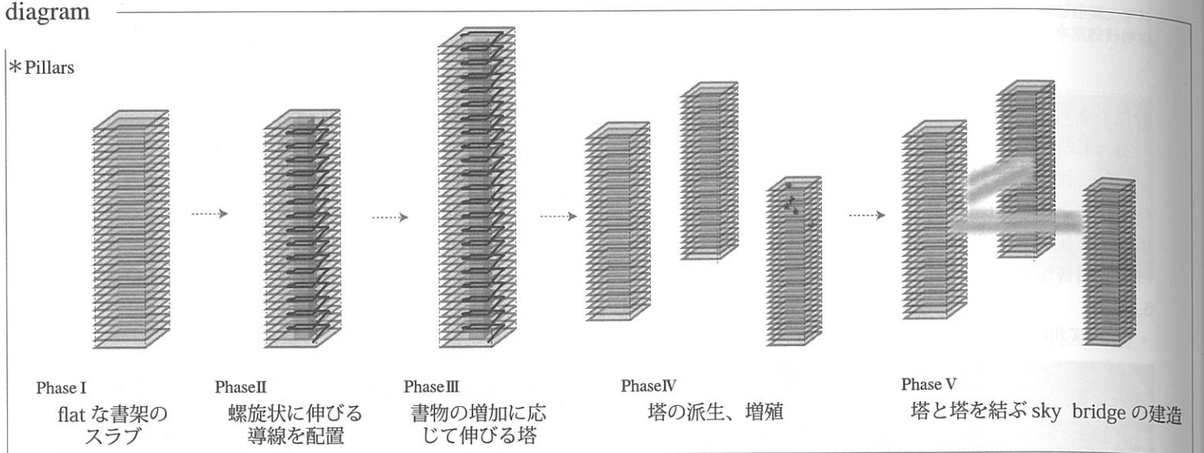
書架の機能をもつ塔をつなぐスカイブリッジには、本来図書館に必要な書架以外の閲覧室などの機能が集約される。機能に特化した無機質な塔と比べ、スカイブリッジは人が集まって書物を読んだり、談笑したり、展示物を見たりと、活動の場が設計される。従来の国会図書館のような、格式の高い図書館というより、地域の図書館のような誰もが気軽に訪れられるような空間を計画する事で、書物に触れる大切さを感じてもらう空間を作る。

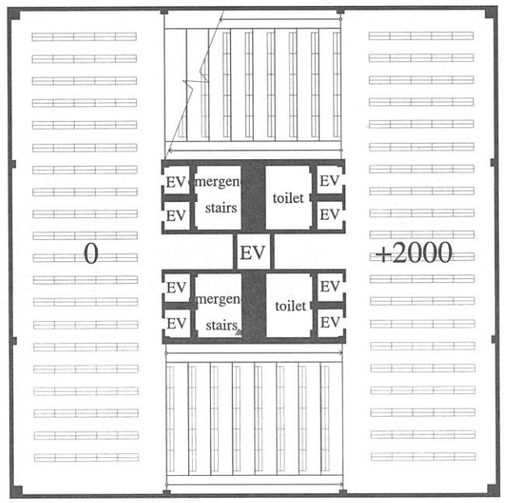
研究指導：伊藤洋子教授

Takahiro KOBAYASHI

diagram

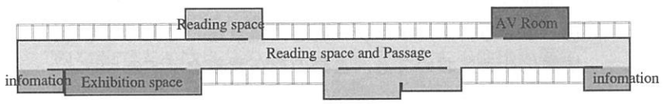
＊Pillars



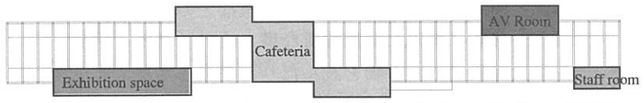


typical floor of pillars 1/500

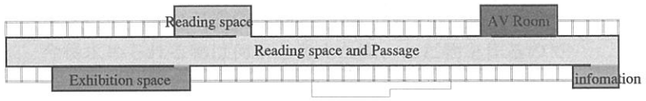
B1 floor of bridge 1/2000



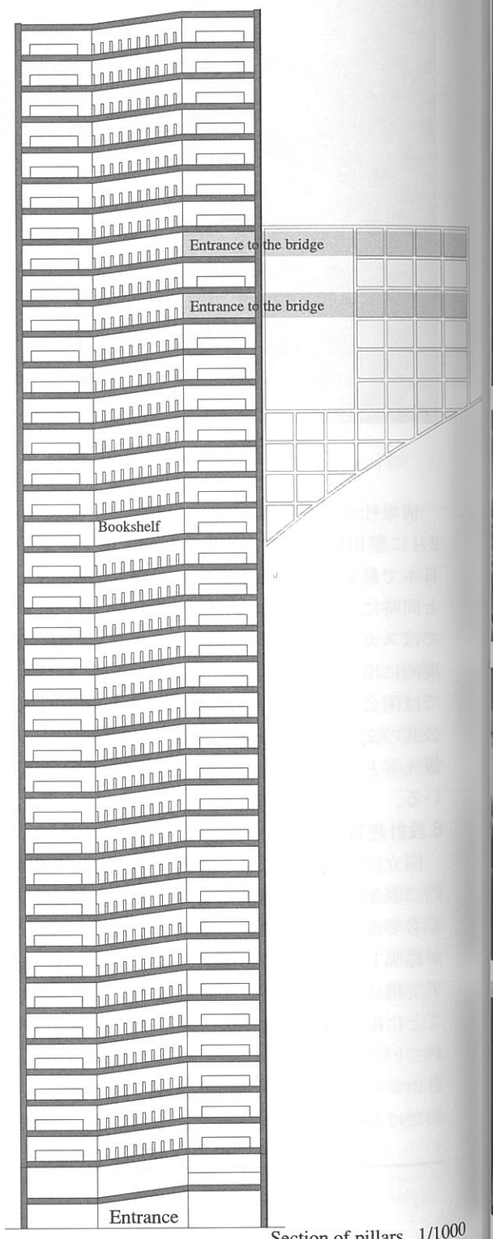
1F floor of bridge 1/2000



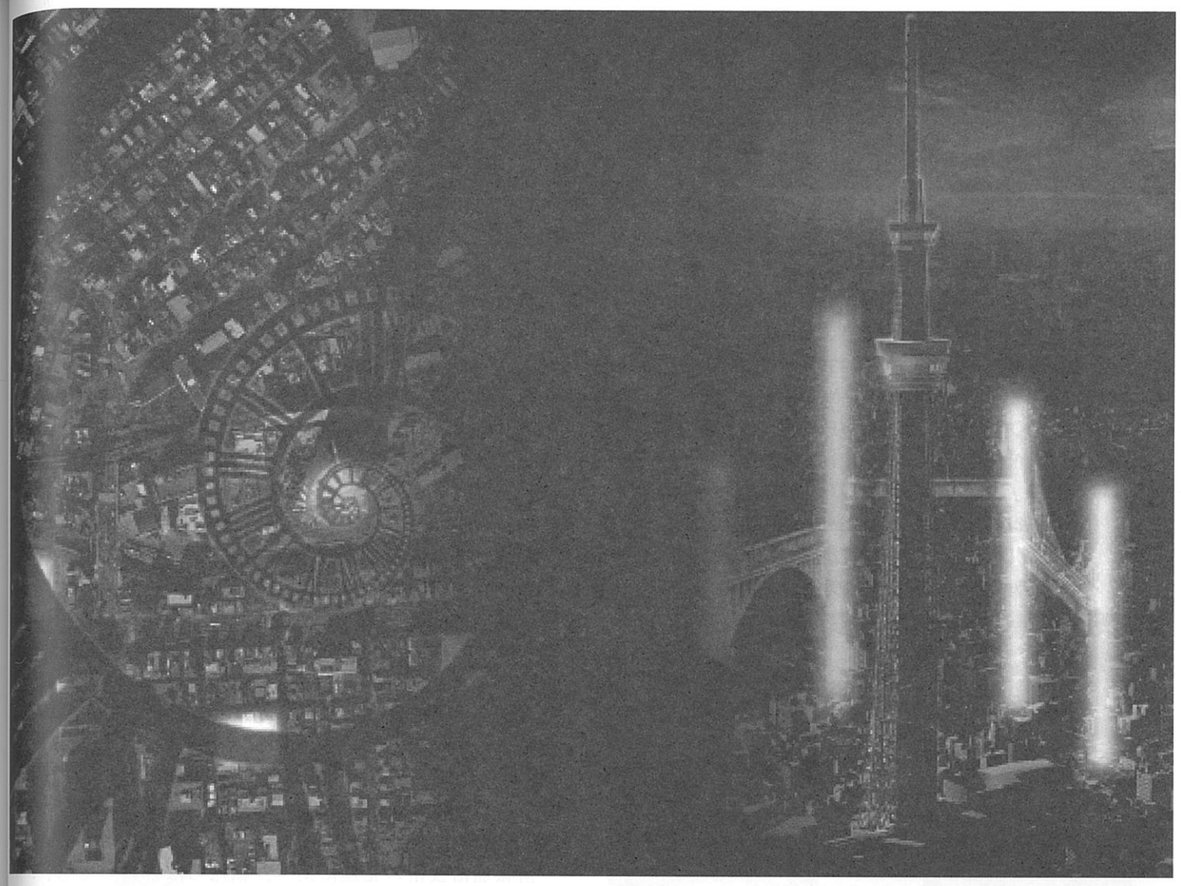
2F floor of bridge 1/2000

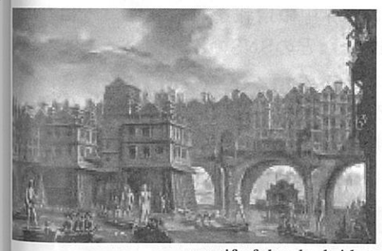


3F floor of bridge 1/2000

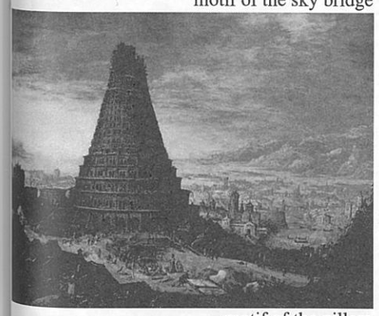


Section of pillars 1/1000

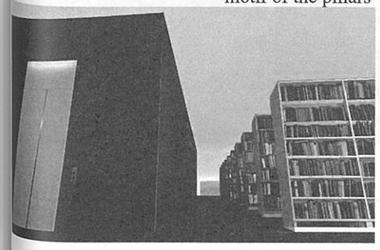




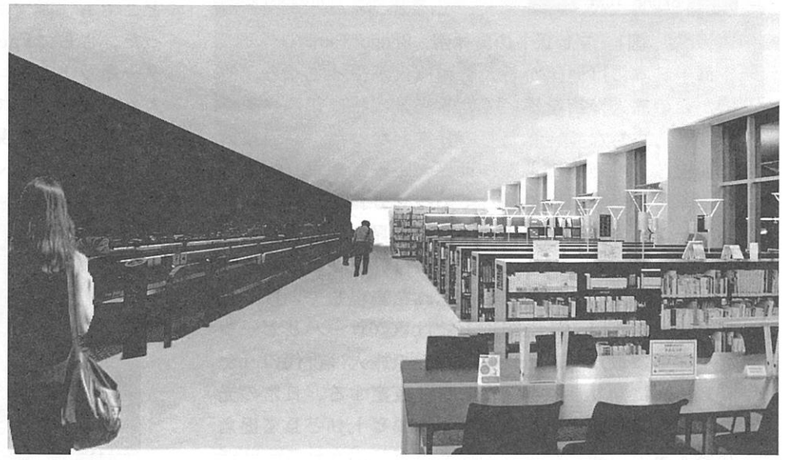
motif of the sky bridge



motif of the pillars



interior perspective



interior perspective

参考文献
1) ダニエル・ピンク「ハイコンセプト」三笠書房 2005
2) ル・コルビュジェ「ムンダネウム」筑摩書房 2009
3) 国立国会図書館「国立国会図書館のしごと」(ソフトカバー)
4) 原 広司、池上 高志、吉村 靖孝、塚本 由晴「アーキテクチャとクラウド情報による空間の変容」
5) a+u05:01
6) 田代真人「電子書籍元年 iPad& キンドルで本と出版業界は激変するか ?」
7) SEATTLE PUBLIC LIBRARY actorA 2005